

---

# 雪月花

我霊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪月花

### 【Nコード】

N8060F

### 【作者名】

我霊

### 【あらすじ】

めでたく藍ヶ峰高校に入学する事になった坂上智也を中心に、色々な事件が巻き起こるドタバタ風ラブコメ（になるはず）。

## 第1話：始まり？

晴れ渡る青空、今は四月で春の陽気と過ごし易い季節。

俺、坂上智也さかがみともやは小鳥の囀りと共に目を覚ました。

「う……う……うん……」

上半身を起き上がらせ、ベッドの上で軽く伸びをする。

時計を見ると、時刻はまだ7時と俺にしては珍しく早く目が覚めてしまった。

まあ、今日から俺が通う藍ヶ峰あいがみね高校の入学式があるため、寝坊などする訳にはいかないのだが。

「今行くには早い時間帯だよな、よし、朝飯食って、1時間くらいゲームでもするとすつか」

家から学校までは電車で凡そ5分、駅から学校までは15分ぐらい、トータルで20分あれば学校に辿り着く。

そのため、8時に家を出れば充分間に合う。

本来なら8時30分までに学校に行かなくてはならないのだが、今日は入学式のため9時まで指定の教室に行けばいいのだ。

「メシメシメシメシ」

鼻歌混じりで階段を降りていくと、チャイムの音も鳴らず勢いよく玄関のドアが開いた。

「うわっ!!」

驚きのあまり、階段を踏み外し滑り落ちてしまった。

尻餅をついた俺は、立ち上がりながらケツを摩る。

「痛って〜! 朝っぱらからビックリさせんなよ……階段から滑り落ちたじゃねーか!」

ケツを強打することになった元凶を見やると、玄関のドアを勢いよく開け、我が家に堂々と不法侵入してきた人物が少々呆れ顔で俺を睨みつけていた。

茶髪にウエーブのかかったセミロング、扇情的といってもいいミニスカートからスラリと伸びた脚、胸元には制服の赤いリボンが付いているが、リボンの上からでもハッキリと胸部のラインが分かる。高校生にしては割とデカイ方だろう。

目尻はやや釣り上がっていて、どこか近寄りがたいという印象を与える。

彼女は俺の幼馴染の倉田恭子だ。

家も近所で、幼稚園から今まで同じ学校、それに加えクラスも常に同じだった。

世間一般では、『幼なじみ』と言われる間柄であるため、母さんを除くと俺に口うるさく言ってくるのはコイツぐらいなものだ。

「それで、どうしたんだよ。　こんな朝っぱらから？」

時間につるさく、几帳面で常に落ち着き払っている恭子にしては、珍しく慌てているように見える。

「あつ！　分かった。　春休みボケで時間を間違えたんだろ。　しつかりしろよな」今日から高校生なんだからな」

いつも恭子には口うるさく言われているのだ、今日くらいは言い返しておかないと、今度はいつ言い返せるかは分からないからな。我ながら情けないと思うが……。

「……ハア」

なぜか、恭子にため息をつかれてしまった。ちよつと待て！

なぜ俺はため息をつかれなきゃならないんだ？  
今日は珍しく早起したんだぞ。  
俺なりに頑張ったんだぞ。

「……智也、春休みボケはアンタの方じゃない」

「俺がいつ春休みボケになったって言うんだよ？　今日は珍しく7時に起きたんだぞ」

自分で言っていて虚しくなったが、ここは敢えてスルーしよう。

「……ハア」

恭子は本日二度目のため息をつく、ガサゴソと制服のポケットの中からケータイを取り出し、ディスプレイに表示されている時間を俺に見せつけた。

時刻は優に8時25分を過ぎていた。

「は……8時25分？」

ちよつと待て！

確かにさっき見た時は7時だったはずだ。

あれから数分しか経っていないのに、これはどう言う事だ？

目覚ましも7時にセットして、万全の体制で挑んだはずなのに……。そう心の中で嘆いていると、脳裏に薄っすらとだがイヤな記憶が過った。

確か……セットした通り7時に目覚ましが鳴ったな。

んで、余りにもうるさかったから、電池を抜いたような……。それにさっきの時計、秒針動いてなかった気が……。

「って事は、このままじゃ遅刻じゃねーか！」

理解するまでにかかった時間、 03秒。

全てを理解した俺も余裕は、どこかへ吹き飛んでしまった。

「分かったら、さっさと準備しなさい！」

「制服！ 制服！！ 制服！！！」

慌ててリビングに駆け込み、制服を探すが見当たらない。

「どこに逃げ込んだんだ、俺の制服！」

「もう！ だからいつも言ってるでしょ、前日にちゃんと準備しなさいって！」

玄関で俺の雄叫びを聞いていた恭子が、リビングに駆け込んできた。  
その口調は、さながら母親のようだ。

「ほら、これでしょ？」

リビングの一角に、箱の中に入っただまの状態で制服が転がっていた。

制服を受け取ったのは一ヶ月ほど前だが、受け取ってから一度も箱から制服を取り出していない。

「早く着替えないと遅刻するでしょ！」

恭子は箱の中から制服を取り出し、俺に手渡す。

「何してるの？ 急がないと遅刻するでしょう」

いや、恭子の言い分は分かるんだが……。

「……俺の着替えても見たいのか？」

「……」

恭子は俺の言いたかった事を理解したらしく、顔を真っ赤にしている。



「見たい訳無いでしょう！ バカ！！」

顔を真っ赤にした恭子は、リビングから勢いよく飛び出していった。

今更恥ずかしがる事か？

俺も恭子の着替えなんて何度も見てるし、見られている。

ましてや、互いの裸も見た事も何度かあった。

まあ、それは俺達が幼稚園ぐらいの話だが。

今、恭子の着替えや裸など見たら、俺の理性など軽く吹き飛び、まず間違い無く俺は獣へと変身してしまうだろう。

それは非常にまずい。

そんな事をしたら、俺は三途の川を渡る羽目になってしまう。

それだけは何とかして避けたい。

「着替え終わったぞ」

制服に着替えた俺は、リビングの前で待っていた恭子に声をかけた。

「急ぐぞ、入学式に遅刻はマズイだろ」

「誰のせいでこうなったと思ってるの」

恭子は不満の声を上げてはいるが、俺が着替え終わる数分の間、玄関の前で待つてくれていた。俺を置いて行けば、遅刻は免れるのに。律義と言うかお節介と言うか……。まあ、そこは素直に有り難いと思う。だが、決して口にはしない。そんな事、恥ずかしくてできる訳が無い。

家を飛び出した俺達は、8時30分の電車に乗る事に成功した。只今の時刻、8時31分。ギリギリ、学校には間に合うだろう。

「いやあゝゝ、何とか間に合ったな」

これに乗り遅れば、遅刻は確定。  
次の電車はこの青ヶ崎駅あおがさきで、急行の待ち合わせをするので大幅なタイムロス喰らう。  
急行に乗っても藍ヶ峰高校の最寄りの駅、藍ヶ峰駅あいがみねには止まらない。そのため、8時30分の電車に乗り遅れば遅刻は確定する。さすがの俺でも、入学早々重役出勤は避けたいところだ。

藍ヶ峰高校は、俺達が乗ってきた青ヶ崎駅、次の赤間崎駅あかまざきを過ぎた藍ヶ峰駅にある。  
藍ヶ峰から歩いて20分程度、この調子で行けば辛うじて遅刻は回避出来るだろう。

「入学式か……かつたるいな」

俺は窓から見える外の景色を眺めながらボヤいた。  
なんだってこんな晴れた日に、そんなかつたるい事をやらなきゃならないんだ。

こんな天気がいい日は遊びに出掛けるか、ひなたぼっこでもしたくなると思うものだ。  
それが出来たら、どんなに幸せな事か。

「ハア……智也らしいわね」

本日四度目のため息をつかれてしまった。

「まあ、気持ちにはわからなくはないけど……」

「だろ？　だろ？　じゃあ、学校なんてサボって、どこか遊びに……」

「却下！」

言い終わる前に、鋭い目付きで俺を睨みながらバツサリと切り捨てた。

「そうかあ？　じゃあ、俺一人だけでも遊びに行くとすつか」

「それも却下！　おばさんに、智也がちゃんと毎日学校に行くように見てってくれて頼まれてるんだから」

「母さんに？」

母さんは父さんの単身赴任に付き添っているため、今は俺一人で暮らしている。

チッ、母さんの監視の目が無い今なら、毎日遊べると思ったのに！

「だから、今は私が智也の監視役なの」

母さんめ、よりにもよって一番厄介なヤツに監視役を頼みやがって！

「あゝあ、遊びに行きて〜！」

俺がボヤきの声を上げたのと同時に、赤間崎駅に到着した。

「あれ、智也じゃねえか？」

「土方<sup>どかた</sup>！」

「土方<sup>どかた</sup>じゃねえ！ 土方<sup>ひじかた</sup>！」

俺のボケに、額に青筋を浮かべ、ツツコミで返したコイツは、どかた……もとい、土方俊彦だ。  
俺や親しいヤツは皆『トシ』と呼んでる。  
コイツとは小学生からの付き合いで、悪友<sup>ライバル</sup>という間柄である。

「こんな時間に登校って事は、寝坊でもしたのか？」

そうでなければ、こんな時間に登校するなんて事はまず無い。

「何言ってやがんだ。お前じゃあるまいし。俺は朝一でバイトやってたんだよ」

吊り革に掴まりながら、トシは答えた。

「バイト？ お前、バイトなんてやってたのか？」

それは初耳だ。

と言っか、コイツを雇ってくれる場所があつた事の方に驚いた。  
短気で無愛想、超俺様主義のコイツがどこで何のバイトをしている  
のか少々興味を抱いた。

「どこでバイトしてるの？」

俺より先に恭子が訊ねた。

「それは秘密だ」

さすがに口は割らないか。  
まあいい、いずれ暴き出してやる。

などという他愛ないやり取りをやっているうちに、電車は藍ヶ峰  
駅に到着した。

藍ヶ峰高校は、小高い丘の上に建てられたため、行きは坂を上らな  
きゃならないのが考え物だ。

ってか、何だって学校ってのは、小高い丘に建てるんだ？  
平地に建てれば、通学も楽になるのに。

「さてと俺の教室は……」

学校に到着した俺達は、昇降口の前に張り出されていた掲示板を  
見る。

願わくば、恭子達と別のクラスでありますように。

「何だ、また智也と同じクラスか……」

……どうやら、俺の願いは聞き届かなかったようだ。

「どうした智也？ 何か落ち込んでるみたいだが」

壁に手を付き落ち込んでいた俺の顔を、トシが覗き込んできた。

「いや……何でもない」

また、一年トシと同じクラスかよ。

これで恭子も一緒だったらと考えると、マジ憂鬱だ。

「アレ、二人共もう見終わっただんだ？」

俺とトシは一組の方から確認し、恭子は六組の方から確認していた。

俺達の名前は一組にあったため、他のクラスは見ていない。

そのため、誰がどのクラスかなど知らない。

と言うよりも、今はトシと同じクラスだという事に軽いショックを

感じていたため、そんな事は頭の片隅に追い遣られていた。

「また三人と同じクラスだね」

嬉しそうに言う恭子とは正反対に、俺は奈落の底に突き落とされたようなショックを受けた。

……どうやら俺は、神に見放されたようだ。



## 第2話：婚約とこんなにゃくって似てるよね？

「……何でこんなに話が長いんだよ」

入学式のため、体育館で校長のクソありがた迷惑で長ったるい話を延々聞かされ、正直もうんざりだ。

俺は入学式で最も嫌いなものとして挙げるとするならば、校長の長い話だろう。

聞かされているコツチの身にもなれってんだ。

なぜ、校長つてのはこんな話を延々と話すんだ？

やっぱ、授業など受け持っていないし、生徒から相手にされない寂しさからくるモノなのか？

だとするなら、相当迷惑な話だよな。

校長、回りの生徒を見てみろよ。

皆、欠伸やらケータイやらいじくってるのがわからんか？

「早く終わんねえかな」

「全くだ。　どうして校長つてのは、皆話が長いんだ？」

トシはパイプイスにもたれかかり、大きな欠伸をした。

「ホント、面倒だよな」。　早く終わってほしいよね」

俺とトシが話していると、後ろから男が気さくに話し掛けてきた。見ると、これと言って特徴の無い、分かりやすく言うなら地味な男が座っていた。

アレ？　こんなヤツ、いたかな？

俺達の後ろに座っていると言う事は、同じクラスなのだろう。しかし、体育館に来た時はいなかったような気がする。だとするなら、いつの間にそこに座ったんだ？

いや、もしかしたら影が薄くて気付かなかったのかもしれない。

「酷いよ」ボクは地味じゃ無いよう。それに、さっきからずっと君の後ろにいたよ。影が薄いなんて酷いよ」

「人の心理描写を勝手に読むな」

コイツは人の心を読む特集能力があるのか？

エスパーか？

エスパーなのか？

それとも、枯れない桜の影響か？

「枯れない桜はここには無いよ」

「だから、勝手に人の心理描写を読むんじゃない！」

俺がツツコんだのと同時に、体育館に拍手の音が鳴り響いた。

おっ、ようやく長い話が終わったのか。

「……長かった」

安堵の息を漏らした俺は、辺りの様子を見渡した。  
皆一様にホッとした表情を浮かべている。

『次に教頭先生のお話です』

進行役である先生がマイクを通し、更なる『退屈』と言う名の地獄の宣告をする。

先程のホッとしたような表情から一変し、舌打ちする者や、ガクツと肩を落とし頂垂れる者もいた。

……マジですか？ 教頭、もう充分にありがた迷惑な話を聞かされたんだ、もう勘弁して……マジで。

「……やっと終わった」

校長・教頭のダブルペアの長くしんどくかつた面白い話も終わり、

教室に戻った俺は達は担任が来るまでの間、教室の窓際で一番後ろの席に座りトシとダベっていた。  
他のクラスメートはと言うと、まだ席は決まっていなかったため、席には着かず親しい者同士が集まり、立ち話をしている。

「……校長と教頭の二人の話だけで1時間とは予想外だ」

俺の前の席に座っていたトシも、俺同様うんざりしたような顔だ。  
まあ、気持ちは分らないでも無いが。

トシの入手した情報では、当初の予定では校長の話のみだったのだが、急遽教頭の話も含まれたらしい。

「……ハア、帰りが1時間も遅れるとはな」

トシは少々不満げな表情で黒板の上の時計を見た。  
俺はチラッと他のクラスメートの様子を窺うが、皆トシ同様に不満げな表情が窺える。  
かくいう俺もその一人だが。

10分程度で終わる予定だったらしい校長の話は30分以上かかり、それに加え教頭の話は20数分。  
計1時間弱と予定を大幅にズレてしまった。  
因みにこの後の予定全てが、1時間遅れるのは言っまでもない。

「ホント迷惑な話だよね」

俺達の側に近寄り、クラスメートの一人が話し掛けてきた。  
コレと言って特徴の無い……。

「だから、僕は地味じゃ無いよう」

「勝手に人の心理描写を読むな！」

ツツコミを入れ終わると、何だかつい最近……と言うよりも、ついさっき同じ事が起きたような奇妙な感じが俺を襲った。  
デジャム……と言うヤツだな。

「デジャムじゃなくて、デジャヴだよ。さっき僕と話したじゃないか」

……さっき話した？  
誰が？

俺が、コイツに？  
マジで記憶に無い。

チラッと俺はトシの方に視線を移すと、俺の視線に気付いたトシは首を横に振った。  
どうやらトシも記憶に無いらしい。

名前が分からないので、勝手にあだ名を付けさせてもらっとして……見た感じ地味だし、ジミーと名付けよう。

「……ところでジミー君」

「僕はジミーじゃないよ」僕には山崎透やまざきとおるっていう立派な名前があるんだよ」

俺が言い終える前に、ジミー……もとい、山崎透に遮られた。

「一つ聞きたいんだが、俺達と一体いつ話したんだ？  
悪いがマジで記憶に無い」

「ほんの数分前に、体育館で話したよう」

存在すら忘れられたためか、山崎はガクツと肩を落とした。

数分前……体育館……

…

……

……………

ああっ！ 思い出した！

そういえば居たな。

地味が目立たない奴だから、すっかり忘れてた。

「目立たないなんて酷いよ」

やっぱり、コイツはエスパーか？

何で俺の心理描写を的確に読めるんだ？

神様よお、そんな能力を山崎に渡すんなら、俺にも寄越しやがれ。

「はいはい、皆適当に席に着いて、ホームルーム始めるよ」

俺の心の嘆きは、突如教室に乱入してきた担任によってかき消された。

白く美しい肌、流れるような黒髪は白いブラウスと相まって一際際立つ。

さらに、魅力的なのはそのユサユサと揺れる豊満な胸だ。

女子高生の成長途上の胸を軽く凌ぐ。

まるで、その豊満の胸が『この大きさこそが本当の胸だ』とでも言わんばかりの存在感がある。

その証拠に、担任のブラウスのボタンが今にもポーンと、擬音を発して飛びそうなくらいだ。

思春期の男であれば、誰でも最初に目に行くのがその胸だろう。

俺も例外では無かったりする。

担任は黒板に白いチョークで『高山碧』と書いて、生徒の方に向き直る。

「これから１年間、この１年１組の担任になる高山碧です。たかやまみどり　ニド  
リちゃんって呼んでね」

大和撫子を思わせる容姿だが、その容姿とは相反し、口調は子供  
っぽい。

まあ、そのギャップに萌えたりする者がいるらしく、一部の男子生  
徒の目がハートマークに変わっているようにも見える。

ホームルームは校則等々、至ってありきたりな話で終わり、２０  
分ほど時間が余ったらしく、生徒達の自己紹介で幕を閉じるはずだ  
った。

しかし、そう上手くいかないのが世の常だ。

きっかけは、男子生徒の何気ない一言『彼氏はあるのか』という質  
問から始まった。

「彼氏はいません。　私はトモヤの許嫁ですから」

そう、この一言さえ無ければ、初日は平穩に終るはずだった。

最後の一人、那波令羅なはれいらが自己紹介を終え、男子生徒の何気ない質  
問をその一言で片付けた瞬間、クラスの皆が固まった。

「許嫁って……婚約者って事？」



一人の男子生徒が尋ねた。

確か田城だか田村だか、そういった名前のヤツだった気がする。  
今の俺には男の名前になど微塵も興味が無く、彼女の言っていた『  
許嫁』の方が気になった。

俺の聞き間違いでなければ、彼女は『私は智也の許嫁だ』と言って  
いたはずだ。

さらに俺の記憶に間違いがなければ、このクラスには『智也』と言  
う名前は俺一人だけだったはずだ。

「智也って……」

不意に担任が発した一言で、クラス中の視線が俺に集まる。

「……もしかして、坂上か？」

「はい」

田城だか田村だか……とにかく男子生徒が尋ねると、那波はさも  
当然のように答えた。

その瞬間から、女子からは珍しいものを見るような視線を、男子か  
らは怨みや嫉妬、憎悪、羨望が入り交じった視線が向けられる。

って、ちょっと待て！

俺はコイツとは初対面だぞ！

なのに、許嫁とはどういう事だ？

いやそれよりも、何だこの殺気立った視線は！  
このクラスには、俺の味方はいないのか？

そう思った俺はクラス中を見回すが、どうやら味方はいないらしく、まさしく『孤立無縁』といった状況に陥っていた。

このクラスでは数少ない知り合いであるトシは我関せずといった態度を示し、唯一友軍と思っていた恭子は、どす黒いオーラを身に纏い、俺を睨みつけていた。

マズイ……この状況は非常にマズイ。

ってか、何故に恭子は俺を睨む。

いや……アレは睨むと言うより、殺意の籠った視線と言った方が、  
この場合正しいのか？

ホームルームが終わったなら、俺は間違いなくクラスメート達からの襲撃に合うだろう。

恭子に至っては、尋問という名の『取り調べ』を行うのは確実だ。

「はいはい」。気になる人はホームルームが終わったなら、直接智也君に聞きなよ。今はホームルーム中なんだから」

担任の救いの手、と呼んでいいのか定かでは無いが、とにかく助かったのは事実だ。

数分とは言え、僅かに猶予がある。

今の内に、最悪の事態を回避するための策を考えねば！



### 第3話：嵐の予感？

「智也、アレは一体どういう事！」

恭子は『バン！』と勢いよく机を叩きつけ、阿修羅も真っ青になるほどの形相で俺を睨んだ。

今、俺達は駅前のファーストフード、『モスドナルド』にいた。メンツはと言うと、俺と恭子とトシ、そして何故か山崎の姿もそこにあった。

そもそも、何故こんな所にいるのかと言うと、話は数分前まで遡る。

令羅の爆弾発言を聞いた俺は、ホーミングの間ずっと上の空だった。

いきなりあの発言は、俺の思考を停止するほどの強烈さがあり、『インパクト許嫁』という言葉が脳裏にこびり付いて離れない。

令羅とは、今日初めて会ったはずだ。

なのに、彼女は俺の事を『許嫁』と言ったのは何故だろうか。

それも気になるが、今俺が最も気にすべき事は他にあった。

言うまでもなく、ホーミングが終わった後、クラスメート達からの襲撃を回避するのかという事だ。

現在考えられる策は二つ。

一つ目は逃げる、二つ目は話し合う。

以上の策　と呼んでいいのかは、非常に微妙なところではあるがが浮かび上がった。

無論、俺が出した答えは『逃げる』という事だ。

当然と言えば当然の結論なのだが、恐らく唯一デッドエンドを逃れるための最善の選択では無かろうか。

聴てホーームルームが終わりに差し掛かると、俺の思考の切り換えは早く、いつでも教室を逃げ出す準備が出来ていた。

ホーームルームが終わった後の、俺の行動は早かった。

その場に居続ければ、追及と言う名の魔の手が俺に伸びて来るのは必至。

それならば、と中身が空っぽの鞆をひっ掴み昇降口に向かってダッシュ。

何とか魔の手を振りかわし、昇降口で安堵していた俺の肩を優しく掴む者がいた。

恭子である。

「アレはどういう事なのか、詳しく教えてくれる智也クウン」

顔は笑っているが、目は笑っていない恭子。

彼女の手を振りきって、脱兎の如くその場から立ち去る事も出来たかもしれないが、そんな事をすれば後が怖い事を知っていた俺は、逃げ出す事も出来ず恭子に引っ張られるがままここに来たと言う事態に陥っていた。

モスドナルドに連れて来られた俺は案の定、恭子による『尋問』と言う名の取り調べを受けていた。

ヘタをすれば、取り調べから『拷問』になりかねない。  
それだけは、何とかして避けねば。

「俺だってどういう事なのか、分かんねえって」

「じゃあ、何で那波さんは智也の事を許嫁って言ったの！」

「だから、俺にも分からねえて！」

知らないものは知らないんだから、そう答えるしか無い。  
それで恭子が納得してくれるとは思ってはいないが。

「もう一度訊くけど、本当に知らないのね！」

「何度も言ってるが、本当に知らない」

「……」

そんな俺達を尻目に、トシはモグモグとハンバーガーを食べ続けている。  
ていた。

ってか、呑気にハンバーガーなんか食ってないで、助けるよ！

「分からないなら、訊いてみればいいんじゃないかな？」

今まで俺達のやり取りを眺めていた山崎が口を挟んだ。

ナイスだ、ジミー！

地味のくせに、いいアイディアを出すな。

「だから、僕はジミーじゃないよう」

「直接那波に訊いてみれば、何か分かるかもしれないな」

山崎が何か言っていたような気がするが、ここは敢えてスルーしよう。

「スルーしないでよう」

涙声で不満の声を挙げる山崎。

だが生憎と、俺はお前にかまってやる程暇では無いし余裕も無い。何せ、今俺が相手にしているのは恭子と言う名の、腹を空かせた人喰い虎なのだから。

一瞬でも隙を見せれば、頭からガブリと喰われる。

「確かにそうね。 智也が知らないのなら、直接彼女に訊いてみるのが一番ね」

山崎の提案に納得した恭子。

怒りが収まってくれたのはいいが、何故俺の言葉は聞かず山崎の言葉は聞くんだ？

俺はコイツに信用されていないのか？

そう思うと、少し悲しくなってきたぞ。

「それなら、直ぐに訊きに行くわよ智也」

「……はい？」

目をパチパチと瞬かせる俺。

その姿は、さぞかし間抜けに見えただろう。

「行くわよって、もしかして今から訊きに行くのか？

別に明日でもいいんじゃないか？」

「今すぐ訊きに行くわよ！ 『善は急げ』って言うでしょ」

「そうか。 行つてらっしゃい」



俺はパタパタと軽く手を振る。

恭子は一度決めた事は、何があろうと曲げない性格だ。  
今の俺が何を言っても、恭子は聞く耳を持たないだろう。  
それなら、コイツの好きにやらせるのが得策だ。

「何、他人事ひとことみたいに言ってるのよ。 智也、アンタも一緒に行くのよ」

「ちょっと待て！ 何故俺も一緒に行かなければならないんだ！」

「アンタが当事者だからに決まってるでしょ！」

確かに俺は当事者だが、コイツから受ける扱いは容疑者のそれに近いものがあると思うのは、俺の気のせいだろうか？

「……何かご不満でも？」

「いえ、滅相も無い！」

一瞬だが、恭子の眼光が青白く光り、背後に般若が見えたような気がした。

ここは黙って、恭子の指示に従おう。

『拷問』だけは勘弁したいんでな。

行くのはいいが、一つ俺には気掛かりな事があった。

「行くのはいいけど、那波がどこにいるのかわかってるのか？」

そう、今は放課後だ。

彼女がまだ学校に残っているとは考え難い。

つまり家、もしくはどこかに立ち寄ったと考えるのが妥当なところだろう。

その場所を特定出来なければ、彼女に話を聞く事は不可能だ。

「…………え〜っと」

恭子は俺の予想通りの反応を見せる。

「居場所が分からないのに、よくそんな事が言えるよな」

「わ…………私だって、たまにはこういうミスぐらいするわよ！」

顔を赤く染め目を背けるが、熱くなったコイツの凡ミスはいつもの事だが、そこは敢えて突っ込まないでおこう。

下手に突っ込んで人喰い虎の逆鱗に触れたりなんかした日には、俺

の命が危ない。  
毎度の事だが、もうちょっと冷静になって物事を考えてほしいものだ。

「噂をすれば影……ってヤツだな、智也」

今まで傍観を決め込んでいたトシが、唐突に口を開いた。

「何がだ？」

俺の問いに答えず無言のまま顎で、ある人物を指し示した。  
見ると、図って現れたかのような絶妙なタイミングで、事の元凶のお出ましだ。

それが、俺にとって幸か不幸か、どちらか判断付きかねないが。

「こちらに居たのですか、トモヤ」

どうやら那波は俺に用があつて探してくれていたらしい。

「ちょうど良かった、那波に一つ訊きたい事があつたんだ」

「それは構わないのですが、その前に私の事は令羅とお呼び下さい。

私はトモヤの事は名前で呼んでいるのですから」

「ああ、分かった。ところで、本題に入ってもいいか令羅？」

「はい」

返事をした令羅は、何故か頬を赤く染めた。

恐らくは、名前を呼んだためだろう。

だが、そこは頬を赤く染めるところなのか？

「俺は令羅とは初対面のはずだが、何故許嫁なんて言ったんだ？  
それとも、以前どこかで俺と逢った事があるのか？」

仮に、以前令羅と逢った事があるなら、相当失礼な話だ。

「いいえ。私もトモヤとは、今日初めてお逢いしました。  
お父様から貴方の事は許嫁だと聞かされていましたので、そう答え  
ただけです」

あゝ、要約すると父親同士が勝手に決めたって事か？  
ギャルゲーにありがちな展開だなコレ。

「あの、トモヤ。私も貴方に訊きたい事があるのですが」

「何だ？」

「式はいつ挙げるのですか？やはり、卒業した後でしょうか？」

「ちょっと待て！」

「何故いきなり結婚式の話？」

「順序が違うんじゃないのか？」

「待て、順序がおかしいだろ。それ以前に、やるべき事があるだろ」

「あつ、そうでした。そちらの方が重要でしたね。すっかりしてました」

「どうやら令羅は、俺が言おうとしていた事が分かったらしい。」

「それで、籍はいつ入れるのですか？」

「前言撤回。」

「俺が言おうとしている事が全く伝わっていなかったようだ。」

つてか、コレはわざとか？  
素なのか？

もしかして、彼女は天然なのか？

「いや、そうじゃ無くってさ……」

「？        それでは、トモヤのご両親のご挨拶の事でしょうか？」

本当に分からないって顔してるぞ。  
どうやら、彼女は天然のようだ。

「どういう事なのか、問い質す事の方が先決だろ」

親父に事の顛末を問い質さなければ、納得がいかない。

「何故問い質す必要があるのです？」

「何故って……それじゃあお前は、俺のような見ず知らずの男と結婚してもいいと言うのか？」

「はい。        父が決めた事なら、私はそれに従うまでです」

俺はその答えに思考が停止しかけた。

『父が決めた事なら、私はそれに従う』

彼女は、何の躊躇いもなくそう答えたのだ。

まるで、それが当然だとでも言いたげで、そこには彼女の意志がどこにも存在しない。

「それって、何かおかしいわよ」

今まで黙って話を聞いていた恭子が口を挟んだ。

「おかしい？ それは何故ですか？」

「結婚っていうのは、好きな人とするものであつて、智代みたいに何の取り柄も無くて、見てくれはカッコイイと言えなくても、そこに愛も何も無いのに、どうして結婚出来るの？」

なあ、恭子……お前、俺に喧嘩を売ってるのか？

もし、売っているんだとしたら買っぞ、二足三文で。

「……」

つかトシ、お前は何故そこで笑いを堪えるんだ？

そこは笑いを堪えるところか？

「坂上君はそんなにカッコ悪くないよ」パツとしないだけだよ」

それは一応フォローのつもりか、ジミー？

「……なんか、お前にだけは言われたくないんだけど、ジミー」

「僕はジミーじゃないよう」

「なるほど、分かりました」

令羅と恭子の二人は、そんな俺達のやり取りなど、どこ吹く風といった感じで聞き流した。

「つまり、私の事をもっとよく知ってもらい、トモヤ自身に婚約の事を納得してもらえばよろしいのですね？」

「いや、そういう事じゃ……」

根本的な問題なのだが、彼女にはそれが上手く伝わっていないよ



うだ。

「今日は用事がありますので、それでは皆さんまた明日」

嵐を巻き起こすだけ巻き起こし、令羅は何事も無かったかのように去って行った。

「……」

それを呆然と見送る俺。

その様子は、さぞ滑稽に見えただろう。

「それで、明日からどうするんだ、智代？」

ニヤニヤとイヤな笑みを浮かべるトシ。

まるで今のこの状況を楽しんでいるかのようだ。

否、楽しんでいるかのようにではなく、事実トシはこの状況を楽しんでいるのだ。

悪趣味だと思うが、仮にトシと俺が逆の立場なら、俺も他人事として楽しんでいただろう。

「……俺、明日から学校休もうかな」

明日からの事を思うと、少々……いや、かなり気が重くなった。

#### 第4話：豪邸ですか？

令羅から『許嫁発言』を聞いた翌日、俺は彼女の自宅に向かっていた。

健全な男なら、誰でも一度は憧れるシチュエーションなのだが、残念ながら俺はそんな下賤な輩とは違い、ちゃんとした理由があるのだ。

令羅の父親に会いに行くためである。

一応前もって言うておくが、『令羅を俺の嫁に下さい！』と言いに行く訳では無い。

令羅の父親に会って、今の俺の正直な気持ちを話に來ただけだ。

そもそも、何故こんな事になったかと言うと話は昨日の夜に遡る。

モスドナルドでの一件の後、家に帰った俺は真っ先に親父に電話した。

無論、『許嫁』とはどういう事なのかを問い質すためである。

「おお、我が息子よ、お前の方から電話を掛けてくるとは珍しいな。何かあったのか？」

電話を出るなり、嬉しそうな声を上げる親父。

「親父に一つ訊きたい事がある」

親父に構うのがメンドーだった俺は、前置きを抜きにして本題に入る。

「訊きたい事？ 何だ、父さんのスリーサイズでも訊きたいのか？」

「違う！」

すかさずツツコミを入れる俺。

ハッキリ言つて、そんな気色の悪いものに興味は無いし、聞こうとも思わない。

まあ、令羅のだったら聞いてみたい気もするが……って、何を言ってるんだ俺は？

「何だ、母さんのスリーサイズか？ 上から9……ぐはあっ！」

電話越しから鈍い音が聞こえた。

恐らく、母さんの鉄槌が下ったのだろう。

哀れな人だ。

「俺が訊きたいのは、令羅の事だよ」

親父と話すとペースが乱れるな、ホント。

「令羅……?」

親父が顎をしゃくりあげ、考えこむ姿が目につく。

「令羅だよ、令羅。 那波令羅」

フルネームを言うと『ああ、令羅ちゃんか!』と答えた。

これでやっと本題に入れるな。

つてか、何で本題に入る前からこんなに疲れなきゃならないんだ?

「それで『許嫁』ってどういう事だよ? 初耳だぞ、それ」

「そりゃ、そうだ。 お前には、一度も『許嫁』の事なんか話してないからな」

「はあ?」

つて、ちょっと待て。  
それはどういう事だ?

「いや、実はな……令羅ちゃんの父親、知治ともはると、その約束をしたのは居酒屋でな……」

今、何て言った？

その約束をしたのは居酒屋って言ったか？

「お前が産まれた祝いの席での事だったし、何より酔ってたからな、向こうも忘れてたのかと思ってたよ、ガハハハ！」

と、豪快に笑い飛ばすバカ親父。  
そんな大事な話を居酒屋でするな！  
息子の人生を何だと思ってやがる。  
アンタ、それでも父親か？

「まあ、いいじゃないか。令羅ちゃん、可愛かっただろ？」

ああ、可愛かったよ。

それは認めてやるよ。

悔しいが、魅入っちゃったよ、悪かったなチキショウ。

……ってか、俺は誰に対して悪態ついてるんだろうな？

「令羅ちゃんの婿養子になれば那波財閥の次期社長で、将来安泰だ

ぞ。こんな良い話は無いぞ」

今の今まで、その約束を忘れていた奴が偉そうに言うな。

「親父……」

「どうした、将来のお前の事を考えた偉大なる父さんの優しさに少しは敬い、感謝し、跪く気になったか？」

「……一度、ぶん殴っていいか？」

「何で？」

「当たり前だ！ この世界に、居酒屋で許嫁を決めるバカな親がいる！！」

「聞いて驚け、ここにいる！」

胸を張り、ふんぞり返る親父の姿が電話越しに見えたような気がした。

……ああ、何か頭が痛くなってきたぞ。

ってか、誰でもいいから、このバカ親父に世間の常識と言うものを

教えてやっくれ。

そんなこんながあり、親父じゃまともな話が聞けそうに無いと考えた俺は、恐らく……いや、多分までもであるはず……いや、まともであつてほしいと心から願う令羅の父親と直接逢つて、直に話を聞く事にしたのだ。

そして、話は冒頭に戻る。

「……」

屋敷の門の前に立ち、あんぐりと口を半開きにして啞然と立ち尽くしていた俺の顔は、さぞかし間抜け面に見えただろう。

令羅が那波財閥の令嬢だと言う事ぐらいは知っていたし、家も大きいんだろつなと言つぐらいは容易に想像出来たが、まさかここまでデカイ家だとは思ひもしなかった。

『豪邸』という言葉がピッタリ当てはまる家も珍しい。

凡そ、東京ドーム5〜6個分の広さはあるそうな敷地だ。

令羅から見れば、我が家は物置くらいにしか見えないんだろうな。つてかどうでもいい事なんだが、何故日本人は建物・場所等の面積や大量の物の体積・容積を表現する際『東京ドーム何個分、或いは何杯分』つていう表現をするのは何故なんだろうな？

別に、ナゴヤドームとかで例えてもいのような気がするんだがな。因みに言つておくが、別に俺は中日ファンと言つ訳じゃ無いぞ。

俺はバリバリの巨人ファンだ。



松井 喜・清原 博・マル イネスが巨人にいた時が一番好きだったりもするが、果たしてそれは何年前の事だっただろうか。暇な奴がいたら、是非調べて俺に教えてくれ。

門を通り屋敷に着くまで、車で凡そ10数分。

歩いたら30分ほど掛っていただろう。

門から屋敷まで、そんな離さくてもいいような気がするんだが。そうすれば、移動が楽に済むのに。

金持ちの考える事は、凡人である俺には理解出来ん。

屋敷のドアが開くと、さらに俺は言葉を失った。

ただっ広いホールにシャンデリア、高そうな壺が所かしこに飾られていたりした。

この家をサラリーマンが建てようとしたら、一生掛っても建てられないんだろうな。

等と思うのは、俺がこの屋敷の威圧感に脳が殺られたためなのだろう。

「令羅、帰ってきてたのか」

「ただいま戻りました、お父様」

階段を降りてきたいかついオッサン。  
ホントに親子？

と疑問符が浮かんでくるほど似通っていない。  
ヤザ顔負けの鋭い目付きで睨まれたら、誰でも怯んでしまつたろう。

「ん？ 隣の子は友達か？」

令羅の隣にいた俺に気づき、視線を向けた。

プレッシャーのようなものが俺を襲う。

シア・ア ナブルのプレッシャーを受けた、ア ロ・イのような気持ちだ。

プレッシャーに打ち負けた俺は身動きが取れず、ただ立ち尽くす事しか出来なかった。

「あ、俺は、令羅…… 那波さんのクラスメイトの坂上智也です……」

声が裏返りながら何とか自己紹介をした俺を、令羅の父親は鋭い目付きで見据える。

その視線から逃れる事が出来ず、次いでくる言葉を待つしか出来ない。

まるで、蛇に睨まれた蛙のようだ。

暫くして昔を懐かしむような笑みを向けた。

「おお、君が智也君か。 若い頃の<sup>ともあき</sup>智明にそっくりだ」

智明とは俺の親父の名だ。

親父から聞いた話によると、知治さんと親父は幼稚園の頃からの友達、と言つか悪友との事。

「立ち話も何だし、奥に入りなさい」

知治さんに促され、先程の緊張した面持ちとは打って代わって、俺はポカ〜ンとした間抜け面で後をついていく。

令羅の父親って、見た目に反して意外と優しい父親なのか？

「あの……一つ、訊きたい事があって本日は伺ったんですが……」

普段から、余り敬語なんて慣れない言葉とは無縁だった俺は戸惑い、しどろもどろになりつつ話を切り出す。

「敬語なんてものを使わないで、普通に喋ってくれて構わないよ」

そう促されて、俺は少しだけ気が楽になった。

やはり、見た目と相反して優しい人のようだ。

「訊きたい事とは、もしかして令羅のスリーサイズかな？」

と、親父と似たようなボケをかます。

親父と同じボケをかますとは、さすがに長い付き合いだけはあるなと、呆れるどころか関心すらしてしまう。

「お、お父様！」

令羅は顔を真っ赤に染め、照れたような顔で知治さんを見据える。その仕草は、昨日の令羅からは想像出来ないほど可愛く思えて仕方がない。

こんな可愛い娘と結婚出来たら、幸せな家庭を築けるかもしれないな。

「どうやら智也君は、令羅のスリーサイズを訊きたいようだが」

知治さんが悪戯っぽい表情を浮かべると、令羅は『そうなのか？』とでも言いたげな顔で俺を見た。

「えっ、いや、違う、違いますよー！」

さすがに、ここで『はい、知りたいです』とは言えないだろう。

「許嫁の事かな？」

知治さん、もしかしくなくても最初から知ってたんじゃないですか？  
俺がここに来た理由を。

まあ、普通に考えれば解る事だろう。

「智明から、何も聞いてないのかい？ …… って、もう10数年前の事だし、それに何より居酒屋で交した事だしね。  
智明が本気にしてなかったのも、無理は無いか」

居酒屋で交したって言う設定は本当だったのか……。

ってか、親父と言いい知治さんと言いい、この二人は子供の将来を何だと思ってるんだ。

これは人生ゲームじゃないんだぞ。

「それで……あの、俺は」

「智也君の言いたい事は、解っているよ。 酔っていたとは言え、酒の席での事だ。

ましてや、父親同士が勝手に決めた事なのだから、私達は二人にそれを強いる気も無いし、何より強いる権利も無い。

二人が互いに納得して婚姻するなら、私達はそれを祝福するよ。  
だから、君はそんな事を気にする必要は何処にも無いんだ」

子供をあやすように優しくな口調で諭す智明さん。

よかった、親父とは違い、まともな人だ。

これで、智明さんまで親父と同じだったらどうしようかと思った。

『類は友を呼ぶ』って言うからな、正直ここに来るまで不安だったが、要らん心配だったな。

「そうだ、令羅、智也君に屋敷を案内してあげなさい。

もしかしたら、そう遠くない未来にこの屋敷の主になるかもしれないからな」

……やっぱり、親父と知治さんは類友だな。

成り行きで屋敷を案内してもらったが、少なからず興味はあった。

これだけデカイ屋敷だ、何か面白い部屋とか物があっても不思議では無い。

令羅に屋敷を案内され、三時間掛けて見た部屋の数は実に二十箇所以上。

それでも全体の三分の一程度しか見回れていない。

屋敷の敷地全部見て回るには、果たして一体何時間掛ければいいんだろうか。

そんな疑問を抱きつつ、今俺は休息を兼ねて令羅の部屋に案内された。

見渡しのいい部屋で、机とベット、少ししか並べられていない本棚が無造作に置かれているだけの殺風景の部屋だったが、思春期の男なら足を踏み入りたい聖域である事に変わりはない。

「どうしました、トモヤ？ 顔色が優れないようですが」

「いや、何でも無い。大丈夫だ」

平常心を装っていたのだが、どうやら顔に出ていたようだ。  
下心は無い……無いのだが、変に意識してしまうのは男の性<sup>さが</sup>ってやつなんだろうな。

「令羅の部屋って意外と物が少ないんだな」

恭子の部屋なんかは、ピンクのカーテンに白いヒラヒラしたものが付いていて、まるで女のコ<sup>こ</sup>って感じの部屋だった。

まあ、恭子も一応女のコ<sup>こ</sup>なのだが。

俺は恭子の部屋基準に、女のコの部屋ってのはこういうもんだと思っていたため、殺風景な令羅の部屋に少し戸惑った。

「恥ずかしいので、あ、余りジロジロ見ないで頂けますか」

顔を真っ赤にしてうつ向くその姿は、可愛いとさえ思えた。

ぬいぐるみを抱き締めるかの如く、令羅をギュッと抱き締めたい衝動を何とか押し殺した俺は、間違いなく下賤な輩の仲間入りだろう。

そんな考えが浮かんでいたためだろうか、どこぞの神様が俺に有り難迷惑な慈悲をくれたのだろう。

何気なくベットに近寄ろうとした俺の足が縛れ、勢い余って令羅をベットに押し倒してしまふ。

「……悪い、令羅。大丈夫だったか？」

今の俺は令羅をベットに押し倒し、馬乗りと言つ健全な思春期の男子から羨ましがられる状況に陥っていた。  
端から見れば、令羅をベットに押し倒し馬乗りしているようも見える。

いや誰がどう見ても、俺が令羅を押し倒して襲っているようにしか見えないだろう。

「ス……スマン。直ぐにどくから……」

言い終えて、ベットに手を付き立ち上がろうとした。

「あん……」

令羅は顔を赤らめ、艶っぽい声を上げた。

「何を変な声……」



言いかけて右手に違和感を感じた俺。

あれ、ベットの感触ってこんなに柔らかかったっけ？

マシユマロみたいに柔らかく、弾力性は抜群だ。

「っ…………！」

さらに力を加えると、令羅は唇を噛み締め声を押し殺し、顔はみるみる真っ赤に染まった。

この感触って、まさか……

俺は視線を令羅の顔から胸元に移すと、何と右手が令羅の胸を触っているではないか。

いや正確に期すなら、俺の右手が令羅の胸を鷲掴みにしていた、と言うべきだろう。

暫くの間フリーズする俺。

この時直ぐにでも右手を退けるべきだった、と後悔するまで数秒前。

ガチャ

俺の背後で扉が開かれ、令羅の父親がお茶とケーキの乗ったトレイを持って令羅の部屋に入ってきた。

「お茶とケーキを持ってきたんだが……」

令羅の部屋は見通しがいいのが災いした。

俺達の格好が、令羅の父親の目に入るまでそう時間は掛らなかった

だろう。

令羅を押し倒し馬乗りになっているのだ、令羅の父親の目に俺がどう映っているのか容易に想像出来る。

「……」

「……」

俺と令羅の父親は、互いに言葉を失い呆然とした。

令羅の部屋は沈黙が支配した。

まあ、無理も無い。

扉を開けたら、男が娘に馬乗りになっているのだ。

当然の反応だろう。

数秒間の沈黙が続く。

この数秒が重く、長く感じたのは初めてかもしれない。

先に痺れを切らしたのは令羅の父親の方だ。

何も言わずスツと部屋から立ち去ると、金縛りにあっていたかのように動かなかった俺の身体は、ここにきてフル稼働を始めた。

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

慌てて部屋を飛び出し、令羅の父親の後を追う。

ピタッと停止すると、俺とは顔を合わせようとはしなかった。

気まずい雰囲気。

咄嗟に呼び止めてしまったが、何て言えばいいんだ！

実は、足を滑らせてしまって令羅を押し倒してしまったんです、とでも言えつてののか？

事実そうなのだが、そんなラブコメにありがちな話を一体誰が信じると言うんだ。

少なくとも、俺が令嬢の父親の立場であつたなら、そんな話なんか信じないと断言できる。

「いや、私の事は気にしないで続きを始めてくれて構わないよ。使用人達にも、暫くの間は令羅の部屋に立ち寄らないように言い含めておくから」

先に動いたのは、知治さんの方だ。

知治さんは振り返ると、意味深な笑みを俺に向けた。

つまり、これは親公認って事になるのか？

つてか、てつきり罵声か怒声を浴びせられるものだとばかり思っていたのだが、意外な反応だな。

正直、罵声や怒声を浴びせられた方が幾らかマシだったかもしれない。い。

「あの部屋は、防音になっているから心配はいらない」

って待て待て待て！

何故その事を俺に教える？

それって、つまりアレか？

俺に男女の仲になれってのか？

なっていいってのか？

それはそれで嬉しいが……いやいやいや、そんな事より普通は俺に怒声を浴びせるべきシチュエーションなのではないか、この場合。なのに、何故俺の行為を認めるんだ？

「トモヤ……」

頬を赤らめ、胸元を押さえながら令羅が部屋を出てきた。

その仕草は、俺の心を驚掴みにして離さない。

知治さんがこの場にいなかったら、間違いなく俺は令羅を押し倒していただろう。

いや今はそんな事より、一刻も早く俺の代わりに弁解してほしい。俺が弁解したところで信憑性に欠けるし、まず信じてはくれないだろう。

だが令羅が事の顛末を話してくれば、恐らく全て丸く納まるはずだ。

「トモヤが望むなら私は、か、構わないのですが……出来ればそういう事は夜にして頂けると……」

前言撤回。

全て丸く納まるどころか、寧ろ悪化してしまった。

この後、令嬢の父親に納得してもらうまで1時間掛った事は言う

までもない。

## 第5話：新入生歓迎イベント？前編

藍ヶ峰高校に入学してから早五日が過ぎ、令羅の許嫁発言、通称『許嫁事変』の後のクラスメートからの何とも言い難い殺意や羨望にも似た微妙な視線も慣れ始めてきた。

最近良く思うのだが、人の慣れとは恐ろしいと言う事だ。

三日間くらいは、クラスメートの視線にげんがりしていたのだが、最近ではその視線を軽くスルー出来るまでになってきた。

だが、恭子の怨念の籠った視線……と言うか、殺意の籠った視線だけはどうにも慣れない。

いや、一生あの視線に慣れる事は無いだろう。

つてか、『許嫁事変』は俺のせいでは無いのだが……。

さて、話は変わるがこの学校は他の学校と比べ、イベントが多いと言う事が最近になってわかった。

体育祭、文化祭、球技大会、修学旅行等々はこの学校にでもあるだろう。

しかし、新入生歓迎パーティー、クリスマスパーティー、バレンタインパーティー、卒業パーティー、等のイベントは他の学校には存在しないだろう。

仮に百歩譲って、新入生歓迎パーティー、卒業パーティーは他の学校にあったとしても、新入生歓迎パーティーはオリエンテーションみたいなものだと考えれば変わったイベントでは無いし、卒業パーティーにしても、卒業生の最後の思い出を作る為のイベントだと思えば全く違和感は無いだろう。

しかし、クリスマスパーティー、バレンタインパーティー等の何故にパーティーにするんだ？

と疑問を抱くイベントは、他の学校にはまず存在しないのではないだろうか。

ってか、そんなに学校行事が多くて授業の進行などには影響しないのか？

とも思ったが、それだけ学校行事が多いって事は、その分授業を受けなくていいって事だし、何より気が楽だ。

それを恭子に言った所『学校行事が多いって事は、その分授業の進み具合も速いんじゃないの？』と返され、剩え『授業に付いて行けなくなつて、1年留年何て事にならない用に気をつけなさいよ』と心配までされる始末。

反論出来ない分タチが悪い。

「それで、どこを回るか決まったのか？」

新入生歓迎パーティーパンフレットなる物を片手に、トシは興味なさそうに尋ねた。

新入生歓迎パーティーと言っても、文化祭のように派手にやっている訳では無く、主に部活に入っている奴が勧誘も兼ねて活動しているだけだ。

中には有志が募り、活動している奇特な奴もいるが。

そういった者達は、暇な奴がイベント好きな奴らだと相場は決まっている。

新入生歓迎パーティーは親睦を深めるため、クラスメイト数人で回る決まりになっており、まだメンバーが決まってない奴は担任により強制的にメンバーを決められる仕組みになっている。

メンバーの親睦が深まり、楽しく回る事が出来れば今年1年は明るく楽しい1年が過せるが、逆に親睦が深まらなければ今年1年はつ

まらない1年になるだろう。

俺は半ば強制的にトシ、山崎、恭子、令羅、黒髪でメガネをかけた男の六人で回る事になった。

一応前もって言うておくが、担任の手によるものじゃ無いぞ。成り行き上、そうなってしまうただけで。

……ん？　ってか、若干一名知らない奴が混じってるんだけど。

俺は黒髪の地味で目立たないメガネをかけた男を見やる。

これと言って特徴の無い……って、何か以前もどこかで同じ印象を抱いた奴がいたような……まあ、気のせいだろう。

「なあトシ、アイツ誰だ？」

トシの肩に腕を回し後ろを向くと、トシにしか聞こえないように小声で話す。

「お前の知り合いじゃないのか？　俺はてつきり……」

どうやらトシも知らないらしい。

一緒に回るメンバーって事は、クラスメイトって事だ。

しかし、俺はコイツを知らない。

見た感じ、山崎に似ていると言えなくも無い。

具体的にどこが似ているのかと尋ねられれば地味な所が、と答えるしかないだろう。



「あの……二人共、何をしてるんです？」

地味なメガネ……名前が分からねえから、とりあえず2代目ジミーと命名しよう。

2代目ジミーが俺とトシに怪訝な目を向け、声をかけた。

「って、誰が2代目ジミーですかッ！」

……成程、地味な奴は人の心理描写を的確に読む、と言う特殊能力を得るのか。

その特殊能力は、どうあがいても俺には得る事は出来ないな。仮に俺がその特殊能力を得たとして、その瞬間から俺は地味と言うレッテルを貼られるのか……それはそれでビミョーだな。

「ボクは村田新八むらたしんぱちですよ。……もしかして、忘れたんですか？」

うん、と頷く俺とトシ。

それを見た2代目ジミー……いや、村田新八なるメガネは肩を落とした。

その顔には涙が浮かんでいるように見えるのは、おそらく気のせいでは無いだろう。

ってか、メンドーなんで見間違いつて事にしとこ。

「智也、クラスメイトの顔を忘れるなんて酷いわよ。

まあ、そりゃ山崎に負けず劣らずこれと言って特徴の無い地味な顔立ちだけど、一応はメガネにかけている訳だし、山崎がメガネをかけたバージョンくらいとでも覚えておかないと可哀想でしょ」

一応、恭子なりの新八へのフォローのつもりなのだろう。

だが、間違いなく俺より酷い事を言ってるぞ恭子。

「そうですよ、トモヤ。せめて駄メガネと言う名前くらいは頭の片隅にでも留めてあげないと酷いですよ」

恭子の後続き、追い討ちをかけたのは令羅だ。

『駄メガネ』と言う名前でクラスメイトを思い出す俺も充分酷いと思うが、この二人ほど酷くは無いだろう……多分。

因みに余談ではあるが、『駄メガネ』とは村田新八の中学の時のあだ名らしく、自己紹介の時にコイツと同じ中学出身の奴の横槍で発覚。

以後、駄メガネと言う不名誉なあだ名を高校でも付けられる事になった。

主に我がクラスのみ、と言う限定ではあるが。

「って、アナタ達の方がよっぽど酷いんですけどッ！」

新八の刃物より鋭いツツコミが入る。  
そのツツコミには俺も大いに納得だ。

ってか、全く関係ない話だが、俺の周りにはボケ役しかないのは何故なんだろうな？

無論、俺もボケ役の一人なのは言うまでもないが。

お笑いには、ボケに対しツツコミが必要なのは当然で、ツツコミがあるからボケが引き立つ。

言うなれば、ツツコミとは縁の下の力持ち、と言ったところだ。

だが、ツツコミ不在の漫才はボケ倒すしかなくなり、面白味に欠ける。

まあ、それはそれで好きだと言う奴は少なからずいると思うが、俺はボケにはツツコミが必要であると言う持論の持ち主だ。

しかし、生憎俺の周りにツツコミ役に徹してくれそうなのは山崎・トシの二人しかおらず、トシは面倒くさがってツツコミなんて言う面倒な事はしないため除外。

山崎では役不足な感が否めない。

つまり、俺の周りにはツツコミ役が不在と言う結論に至る。

そこに現れた救世主・2代目ジミーは素直に喜べる存在であった。

コイツのツツコミとしての才能を失うのは非常に惜しい。

「どうせ、僕は存在感薄いですよ。これと言って特技も無いし…」

…」

とうとうイジけた新八。

もし、ここに砂か石があればそれをイジっていてもおかしくはない。

「そんな事はない。確かに、お前は地味だがツツコミと言う才能があるだろう」

「……褒めてるのか、けなしてるのかどっちですか、それ？」

俺は最大級の褒め言葉を口にしたのだが、新八には全然、全く、これっぽっちも伝わっていないようだ。  
思いを伝えるってのは難しいな。

「どうしてもいいけどよ、早く回らないと時間無くなるぞ」

俺、恭子、令羅、新八の四人の漫才をトシは事も無げにスルーしやがった。

「私は、この『お化け屋敷』と言う所に行ってみたいのですが」

今まで前置きを完璧に無かった事にし、令羅はパラパラとパンフレットを見て、あるページでその手を止めた。

マイペースな奴らだよ、ホント。

お前ら、お似合いのカップルだ。  
一度試しに付き合ってみろ、絶対に上手く行くよ。  
俺が保証する。

今までの前置きを軽くスルーした令羅の提案で、お化け屋敷に行

く事になった俺達一行。

藍ヶ峰高校の校舎は北塔・中塔・南塔の3つに別けられており、北塔は学生の教室、中塔は文化系の部室、通称・部室塔で、南塔は旧校舎で現在は使われていないため、今は物置と化している。

渡り廊下を抜け、部室塔に向かう。

目指すは部室塔の二階、お化け屋敷だ。

パンフレット見て一つ疑問に思ったんだが、何故主催が演劇部なんだ？

普通、演劇部と言ったら体育館で演劇をやるものではないのだろうか？

等と、どうでもいい考え事をしていると、どうやら目的地に着いたらしく、他のメンバーは教室の前で立ち止まっている。

この演劇部主催のお化け屋敷は、ペアで回る決まりになっており、その組み合わせをどうするか悩んでいるようだ。

「じゃあ俺と令羅、トシと恭子、ジミーズのペアでいいんじゃないか？」

ここで悩んでいても時間の無駄だと考えた俺が提案すると『誰がジミーズですかッ！』という新八のツツコミが入ったが、軽くスル！。

ここで反論したら、さらに余計な時間と手間が掛かりそうだからな。

「いいんじゃないか」

と、賛成するトシ。

「私は別に構いませんが……」

こちらも賛成の令羅。

「え？」

二人とは反対に驚きを隠せない恭子。

どうやら、この組み合わせに納得がいかないようだ。

「『え？』ってのは、一体何だ？ この組み合わせに不満なのか？」

「別に何でも無い」

そう答えた恭子が俺には、何故か悲しそうに見えたのは気のせいだろうか？

「そっか……令羅って、智也の許嫁だもんね。 智也がペアを組みたいと思うのは当たり前か……」

恭子はポツリと呟く。

それが何を意味するのかは俺には分からず、その意味を恭子に尋ねようとして『行きますよ、トモヤ』と令羅に促され、結局尋ねる事が出来なかった。

お化け屋敷の中は意外と本格的に作られており、暗幕で光を遮断し、所々人の形をした骨が無造作に転がっていて、モチーフは墓場なのだろう、墓標がよりリアルさを醸し出していた。

「へえ、意外と本格的なんだな」

中に入って第一声がそれだった。

「そ、そうですね……」

俺の斜め後ろをゆつくりと歩く令羅。

薄暗いためハッキリと見えないが、その表情はどこか青ざめているようにも見える。

「ト、トモヤ……あの、申し訳ないのですが、出来ればもう少しゆつくり歩いて頂けませんか？」

成程、令羅はお化け屋敷が苦手らしい。

「何だ、お化け屋敷が苦手なら苦手って言うてくれればいいのに」

お化け屋敷が苦手なのに、何でわざわざここを選んだんだ？  
怖いもの見たさって奴なのか？

「べべべ、別に、お化け屋敷が怖いとか、そういう事では無くてです  
ね……ただ、折角なのでもっとゆっくり歩いて、ここを満喫しよ  
うかと」

何故か令羅の言葉が途切れ、先程よりどんどん顔色が悪くなって  
いき、硬直する事数十秒。

「キャアアア　　！」

固まったかと思うと令羅は突然俺に抱きついてきた。

やっぱり、お化け屋敷の醍醐味は女の子に抱きつかれる事だろう。

「いいい、今、足元に柔らかいものが……！」



俺の腕にも柔らかいものが。  
今の俺は極上の幸せを味わっていた。

何とか令羅を落ち着かせ、ゆっくりとだか着実に出口の方に向かっていく。

その間、令羅は俺の腕にギュッと抱きついていて、胸は非常に柔らかかったと明記しておこう。

トボトボと歩いていると、前方から微かに光が差し込んできた。  
やっと出口に着いたのだろう。

お化け屋敷に入ってから、時間が長く感じた。  
だが、出口が見えた時点で終わりではなく、お化け屋敷は出てからが本当の終わりなのだという事をこの時の俺は完全に忘れ去っていた。

出口が見えたため令羅は、半ば俺を引っ張る形で出口へと歩を急いだ。

しかし、それは突如として襲ってきた。

「わっ！」

出口付近で息を潜めていた女子生徒が、俺達を驚かす。

「キャアア                      ！！」

何とも古典的な方法だが、今の令羅には効果は抜群だったらしく

悲鳴を上げ、俺の腕にギュツとしがみついていた。  
パニックる令羅を可愛いと思った事は内緒だ。

何とか無事お化け屋敷から生還した令羅と俺。

未だ余韻が納まらないのか、お化け屋敷を出た後もずっと俺の腕にしがみついていた。

いつもは凜とした雰囲気醸し出している令羅は、それはそれで可愛いのだが、パニックた令羅もこれはこれで可愛い。

ここが学校で無かったら、多分押し倒していただろう。

心の中で、ここが学校で良かったという安堵の息を漏らしたのは俺だけの秘密だ。

それから間もなくしてトシ・恭子ペア、ジミーズペアの二組が出てきた。

お化け屋敷から出てきた四人の表情は様々で、トシはこれといった変化は見当たらず、ジミーズは驚きの表情で、恭子はどうと何故かムツとした表情で俺達……というか、主に俺を睨んでいた。

ってか、何で俺は睨まれなきゃならないんだ？

何か睨まれる様な事しかしたか？

「ふーん、随分仲良くなれたみたいね。腕なんて組んで」

どうやら、俺達が腕を組んでいる事に不満のようだ。

ってか、これは俺のせいでは無いんだが……。

「こ、これは違うぞ。　その、何て言うか……」

「まあ別に、私には関係ないけど」

弁明を試みるも、恭子に一蹴されてしまった。

今日一日、恭子のドス黒いオーラを浴びせられながら回るのかと思うと憂鬱になる。

かつたるいと心の中で嘆き、未だ俺の腕を解放しそうにない令羅と共に、重い足取りで再び校内を歩き回る俺であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8060f/>

---

雪月花

2011年7月30日12時28分発行